「それでも、希望は絶えない」
列王記下 25 章 1－7 節、27－30 節

今日からアドベント（待降節）に入り、クランツの最初のろうそくに「希望」の光が灯されました。私たちは本当に希望を必要とする時ほど、過去の失望や現実の厳しさに圧倒され、期待すること自体を恐れてしまいます。共に交読した詩編 130 編の詩人もまた、深い淵の底から神を呼び、「夜明けを待つ見張り」のように主を待ち望みました。それは、今はまだ夜の闇の中にありながら、主の御言葉に望みを置く姿です。

今日の列王記下 25 章には、まさに深い暗闇に置かれた南ユダ王国の滅亡が記されています。神に背き続けた人々に対し、神は預言者エレミヤを通して繰り返し立ち帰るよう呼びかけられました。しかし当時の王ヨヤキムは神の言葉が記された巻物を切り裂いて燃やし、最後の王ゼデキヤも恐れから神の警告に従わず、紀元前 586 年、エルサレムは陥落します。聖なる都と神殿は破壊され、ダビデ王に与えられた「王国はとこしえに続く」という神の約束を示すしるしが失われ、人々は神との関係までも失ってしまったのではないかという絶望に直面したのです。

ところが列王記は、この悲劇で終わってはいません。最後の四節には、バビロンへ捕囚となっていた前王ヨヤキンが、37 年目に牢獄から解放され、生涯王の食卓につくことを許された出来事が記されています。王国は滅びた。しかし、ダビデの子孫は、なお生きていた。そこに私たちは、神の約束がなお生きていることを示す希望のしるしを見るのです。人々は神の約束を見失ってしまったかもしれません。しかし、神は、その約束を忘れてはおられませんでした。

マタイによる福音書は、このヨヤキン（エコンヤ）の名をイエス・キリストの系図の中に刻んでいます。あの列王記の最後の四節には、確かな続きがあったのです。マタイは、神の約束が途絶えたかに見えたバビロン捕囚さえも、キリストへと至る歴史の大きな節目として記しています。神は、人間の罪と過ちに満ちた歴史を切り捨てることなく、その歴史のただ中に救い主を送ってくださったのです。人間の不真実にもかかわらず、神は御自身の約束に真実であり続けてくださったのです。

私たちの人生にも、変えられない過去や苦しみがあります。しかし、南ユダの滅亡が神の救いを終わらせなかったように、私たちの人生も過去の出来事や今の現実だけで決まってしまうのではありません。神は私たちが暗闇から抜け出すのを待つのではなく、「インマヌエル（神は我々と共におられる）」として、暗闇の中へと自ら来てくださったからです。

私たちの希望が絶えないのは、私たちの側に何かが残されているからではなく、私たちを救おうとされる神の愛と約束が決して絶えないからです。だから、たとえ私たちが希望を失うことがあっても、私たちの希望そのものが失われることはありません。私たちの希望は、私たちの中にあるのではなく、イエス・キリストにあるからです。

夜明けを待つ見張りは、朝が必ず来るからこそ、待つことができるのです。まだ、夜は明けていません。しかし、主は必ず来てくださいます。この希望に支えられながら、主イエス・キリストを待ち望むアドベントの時を、共に歩んでまいりたいと願います。